

## 弓道からみた儒教の文武教育

秦兆雄

本発表は主にフィールド調査に基づいて、弓射をめぐる日中の文武教育の交流史を探り、その関連性と普遍性を明らかにする試みである。

孔子は私塾を開き、周王朝時代の六芸教育制度を活用して、後世に「至聖先師」の称号を受けるようになった。六芸の中の「射」は上流社会に尊ばれ、必須の素養として重視された。

「射」は「礼」と一体とされ、為政者の表芸であり、観徳の器として官吏の登用にあたっては弓射を行なわせて人物を識別し、人材を選抜していた。『礼記・射義』にある「射は進退周還必ず礼に中り云々」は、弓人の常識である。孔子は「射は仁の道なり」といい、孟子も「仁は射の如し」といって、弓射を人格形成の基としていた。

儒教の礼射思想は、五世紀頃から日本に伝わり、弓射における儀礼的側面の醸成に繋がり、文武両道の教育体系と道德規範の形成に大きな影響を与えた。『礼記・射義』は江戸時代の吉見順正の『射法訓』と共に、1971年以降、日本の弓道の基本理念として、財団法人全日本弓道連盟編『弓道教本』第一巻の冒頭に掲載され、殆どの弓道場の壁に掲げられている。2006年に日本の主導により設立された国際弓道連盟も、同様の弓道理念をもって、心身鍛錬および真、善、美への追求を目標としている。

儒教思想を取り入れて発展し、国際化した日本の弓道文化は近年、逆に近世以降衰退し、毛沢東時代には正式に停止した中国の伝統弓射の復興を促進する一因になっている。

『礼記・射義』にみられるように、弓道は、矢を発して中らなければ他を怨むようなことなく、反ってこれを己に求めてよく反省せよ、と教示するもので、儒教を基礎とした道德の修養の方法である。スポーツ以上に自己反省が体感できるため、弓道の文武教育的意義は大変大きく、また普遍性をもち、中日両国が共有可能な長所であり、両国民が相互理解しうる歴史的価値観と文化的な資源である。